

(西暦) 2017年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

寛骨臼関節唇と腸腰筋の位置関係について

学位の種類: 修士 (健康科学)

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻

フロンティアヘルスサイエンス学域

学修番号 16898601

氏名: 高橋亮吾

(指導教員名: 易 勤)

【背景と目的】寛骨臼関節唇損傷の原因は骨形態異常による大腿骨寛骨臼インピンジメントによるもの以外の一つに寛骨臼関節唇と腸腰筋腱の位置関係から腱の張力などにより損傷を引き起こす可能性が議論されている。臨床報告には損傷した寛骨臼関節唇と股関節伸展位でタイトネスが確認される腸腰筋腱との関係を認めた。本研究の目的は肉眼解剖における寛骨臼関節唇と腸腰筋の位置関係及び形態特徴について調査し、リハビリテーションにおける治療プログラム作成への一助とすることである。

【方法】日本歯科大学生命歯学部学生用解剖学実習体6体12関節(男性3名、女性3名、平均年齢 87.2 ± 8.1 歳)を用いて、大腰筋と腸骨筋の腹側及び背側を大腿骨小転子から時計3時方向の寛骨臼関節唇に接触するまでの縦幅と3時方向の寛骨臼関節唇に位置する横幅をVernier caliper (Matsui Seimitsu inc.)を用いて測定し、筋・腱成分の割合を算出し、大腰筋と腸骨筋の2群間で統計学的に比較検討した。

【結果】大腿骨小転子から3時方向の寛骨臼関節唇までの腸腰筋腱の腹側の縦幅は全長 74.1 ± 6.6 mmに対し、腹側の大腰筋は筋成分が 34.3 ± 19.1 mmで46.3%、腱成分が 39.8 ± 21.2 mmで53.7%から構成されていた。腸骨筋は筋成分が 74.1 ± 6.6 mmで100%筋成分にて構成されており有意差を認めた($p < 0.01$)。横幅は全長 38.6 ± 5.8 mmに対し、腹側は大腰筋の筋成分が 10.6 ± 3.7 mmで27.5%からなり、腸骨筋の筋成分は 26.7 ± 5.2 mmで69.2%からなり腸骨筋の筋成分を多く認めた($p < 0.01$)。一方背側は、大腰筋の腱成分 16.8 ± 5.5 mmで43.5%、腸骨筋の腱成分 8.8 ± 6.1 mmで22.8%と大腰筋の腱成分を有意に多く認めた($p < 0.05$)。

【考察と結論】寛骨臼関節唇に位置する腸腰筋の横幅は腹側が腸骨筋、背側の多くは大腰筋腱で構成されていた。寛骨臼関節唇に前方関節包を介し接触するのは大腰筋腱の可能性が考えられる。この寛骨臼関節唇に対する腸腰筋の位置関係と構成成分が関節唇損傷を引き起こす一因となるのではないかと考えられ、リハビリテーションにおいては腸腰筋腱に考慮したアプローチを行っていく必要があり、股関節のみならず脊椎及び全身を含めたTotal conditioningをしていくべきであると考えられる。しかし、どれ程の形態特徴であればリハビリテーションの効果が有効であるのかは不明であり、今後は画像検査や理学所見を合わせた情報蓄積が必要になってくると思われる。

キーワード: 寛骨臼関節唇、腸腰筋、遺体の肉眼解剖